

インフィニット・スト  
ラトスー黒き死神は常  
闇を舞うー

鴉@地獄よりの使者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

篠ノ之束がIS《インフィニット・ストラトス》を開発し世に出てから幾年が過ぎた。その頃からIS界限や軍関係者の中でひとつの噂が流れる。

『モノクロの全身装甲IS数機が違法な研究施設などを襲撃している。』

解除したところを目撃した者によると全員が黒い髑髏のマスクを装着。体格は女性  
の言うよりもむしろ男性の様だった』

というものだ。

これは自らを死神と称した青年とその仲間たちが織り成す物語である。

# 目次

4話	3話	2話	1話	序章	序章	序章
				②	②	①
64	56	44	27	16	7	1



# 序章 — ① —

死神と言われてどう言ったものを想像するだろうか

古代より死を司るものとされ、戦争を題材にした映画やアニメでは自分の部隊が壊滅してなおただ一人生き残り続ける者に贈られる渾名のようなものだ。

なんで今こんなに話をするかって？

今日の前にその死神がいるからさ、しかも前述の前者の方な。

こうなつた経緯を少し話していこう。

---

傭兵 side

ここはドイツ某所の山奥。

俺はとある組織に雇われた傭兵だ。

特に特筆すべきものもないからここでは自分のことは省くとしよう。

ここではとあるシステムの研究、実験が行われている。

こんな山奥でひっそりやってんだ、やばい事以外の何者でもねえよ。

子供の泣き叫ぶ声が聞こえるのは日常茶飯事、逃げた子供を連れ戻したりもした。

それにここに来て数ヶ月でいくつ死体袋運ばされたか分からねえ。

しかも全員年端も行かねえ子供だ。

何度ここから逃げ出そうとしたかわからない、ここはヤバすぎる。

そう思い始めてしばらく経った頃事件は起きた。

俺は一緒に雇われている傭兵たちと昼飯後のコーヒーブレイクとしゃれこんでいた。そんな中いきなり研究所内にけたたましい警報が鳴り響き、俺を含めた傭兵たちは侵入者がいるという区画へと急行した。

件の区画に着いた俺たちの目の前に広がっている光景はまさに地獄と行って差し支えなかった。

建物は見事に瓦礫へと姿を変え、所々では火の手も上がっている。

연구원と思わしき死体は人の原型を留めておらず辛うじて人であったモノというのがわかる程度だ。

そんな地獄の中に何か黒いものが立っている。

その頭には赤い単眼を黒い全身装甲の I S、両手には巨大な片手斧が握られている。

その斧からは血が滴り落ち、小さな肉片がこびり付いている。

その単眼の着いた顔をこちらに向けると左手に握った斧をこちらに向けて投げた。

その斧は俺の左隣に居た仲間を真つ二つに両断し後ろの壁に突き刺さった一瞬全員が何が怒ったか判別がつかず動きが止まる。

そこを見逃すほど黒いISは甘くは無かった。すかさず俺たちの方へバーニアを吹かして接近してくる。

俺はとっさに携帯しているアサルトライフルを奴に向けて撃ちまくった。

その銃声を聞いてほかの傭兵達も撃ちまくった。

わかつている、俺たち歩兵が持てる火力でISに太刀打ち出来ないこと。

俺達がこうして戦っていることによつて稼いだ時間で研究員たちは逃走していること。

俺達が捨て石に使われていること。

1人、また1人と仲間は減っていく。あるものは斧で体を両断され、あるものは足から出たドリルで体を貫かれ、またあるものは頭を掴まれ鉄の杭で頭を貫かれたりと人の死に方とは呼べない形で命を落としていく。

かく言う俺は辛うじて生き長らえていた。だが斧で両腕の肘から先がぶつた斬られ戦力外となっていた。

最後の仲間が斧の餌食となりこの場で生きているのは俺とあのISのパイロットだけとなる。

俺は死を覚悟した。

だが黒いISは装着を解除し懐から出したスマホでどこかへ連絡し始めた。少し話して通話が終わったのかスマホを懐へと入れ俺の方へと歩いてくる。

顔は仮面で隠されていてわからない、体格からして恐らく細身の男。

男が壁にも垂れている俺の顔を覗き込むようにしやがみこう言い放った。

『生きたいなら俺と来い、死にたいなら介錯はしてやる。どちらを選ぶもお前の自由だ。』

俺ボイスチェンジャーで変えた声で放たれた言葉に少し動揺するがこう答える。

「こんなところで死ぬのは真つ平御免だね……、仲間の血を啜ってでも生きてやるさ……。」

『交渉成立。ようこそ、死神旅団へ。』

それを聞くと俺は意識を失った。

傭兵 side out



## 死神 side

今回の俺たちのミッションは成功である。

目的は3つ

- ①当該施設、研究資料、機材の破壊。研究員の排除
- ②当該施設に監禁されている子供の救出
- ③当該施設の警備にあたっている傭兵「……………」の確保又は殺害  
(生存していれば四肢程度ならなくても構わない)

1つめは既に達成、2つ目も研究員の排除途中に回収完了の連絡が届いている為達成、残るは3つ目の傭兵の確保。

上司に向けての報告も済ませ、傭兵の方へ足を進める。

しゃがんで目線を合わせてこう言い放つ。

『生きたいなら俺と来い。死にたいなら介錯はしてやる。どちらを選ぶもお前の自由だ。』

少し驚いた顔を見ると二カリと笑うとこう答えた。

「こんなところで死ぬのは真っ平御免だね……、仲間の血を啜ってでも生きてやるさ……………」

俺は仮面の下でニカリと笑いこう続ける  
『交渉成立。ようこそ、死神旅団へ。』

死神 s i d e o u t

---

ここにまた死神の元へと集った強者が1人。  
これから世界はどう転ぶのか、今は誰も知る由もない。  
それを見届けるのはあなただ。

## 序章—②—

傭兵 side

俺が目を覚ますと見慣れない天井が見えた。

消毒液の匂いがする事から病院かそれに準ずる施設だろう。

起きたての回らない頭で考えてもなぜ自分が生きているのか分からないでいた。

とりあえず体を起こそうとベットに手を着いた

普段なら気にすることの無い動作ではあるが今の俺にとっては大きな意味を持つ。

なぜなら俺の両腕の肘から先は全身装甲の I S との戦闘で切り落とされているはずなのである。

にも関わらず自分の腕はちゃんと感触がありなんの違和感もない。

そんな感じで困惑していると自分のいる部屋の扉が開いた。

そこには自分に生きるか死ぬかの選択を迫った黒い髑髏のマスクの男ともう一人。まるで不思議の国のアリスのアリスのアリスが着ているような服装に身を包んだデフォルメされたウサギのマスクを付けた女性が現れる。

ウサギ『おつ、目覚めたみたいだね。3日も起きないからもう起きないかと思ったよ』  
 髑髏『ラビット、あまり詰め寄るな。体調はどうだ?』

入ってくるなりウサギマスクは俺の顔を覗き込んでマジマジと見つめ、それを止めるように注意する髑髏。今回は髑髏の声は変声されてはいなかった。

傭兵「体調は問題ない……じゃなくて!ここはどこであんたら誰だよ!」

髑髏「とりあえず落ち着け、その説明と恐らく一番驚いているだろうその腕のことも話に来た。」

ウサギ「じゃあその間にメデイカルチェック済ませちゃうね。説明とかはスカルの方が得意だしね。」

髑髏「俺としては面倒事を押し付けるのはやめて欲しいんだがな。あと偏食。食事係が毎回泣いてるぞ」

ウサギ「だって野菜美味しくないもん!それに偏食は今言うことじゃない?!」

髑髏「そう思うなら少しは克服しろ。時間がもつたないから説明に移るぞ。」

ウサギは頭に着いたメカメカいうき耳からUSBコードをベッドに備えつけられている機会にセットし、機械の下部から引っ張り出したコンソールを叩き始めた。

スカルと呼ばれた髑髏は丸椅子を引き寄せて座り俺を見据えた。

スカル『さて、まずは君の今の状況についてだが君が両手を失ってから丸三日経って

いる。その腕はうちの医療チームが君の細胞から採取した遺伝子情報から再生させたものだ。で、身柄だが現在我が死神旅団が預かっている状態だ。君は1度死んだことになっている。まああんな凄惨な死体の中に断面が焼けている腕だけあつても不思議がられんだろう。ここまでで質問は？」

傭兵「状況と腕がある理由に関しては分かった。だが分からない。こんな技術のある組織が何故俺みたいなしがないフリーの傭兵を攫うような真似をした？仕事なら雇えば良いだろうしそれだって言いたかれないが俺より腕のいい傭兵なんて探せばごまんといるぜ？」

ラビット『それには君の遺伝子情報が関係してるんだよ！』

コンソールを叩きながらラビットが話し始める。

ラビット『うちの開発チームがなかなか優秀でどえらいシステム完成させちやつたのよね。ISの適正や適正レベルを解析するだけなら現行のシステムでもいいんだけど、うちが開発したシステムの凄いとところは少量の遺伝子情報だけで精度はそのままに適正、適正レベル、これからの伸びしろまで分かってしまうのだ！』

傭兵「……………、システムが凄いいのはよく分かった。でもそれが俺にどうやって結びつくんだよ？」

スカル『2週間前位に病院にかかったら？うちの組織は表の顔じゃ色々手広くやつ

ててね。お前の行った病院もそのひとつって訳だ。あとは何となく分かるだろう?」

傭兵「…なるほど、検査の時に採られた喉の粘膜か。保険証も出してるわけだし俺と特定するのは雑作もないことだな。それにこんなに技術力があるんだ、俺の今の状況なんて今のご時世ハッキングでも何でもすれば俺の個人情報なんて丸裸だな。で、俺をここに連れてきたのはその I S 適正があるとかか? 男の俺にそんなものある訳ないじゃねえか。」

俺は参つたとばかりに両手をあげて鼻で笑う。

スカル『もしそうだと云つたらどうする?』

この時のスカルの声は真剣そのものだった。そう云つて一枚の書類を渡される。

『さつき言つてたシステムで検査した結果を乗せたお前の経歴書みたいなものだ。』

《氏名》 ジン・ナキリ (百鬼 刃)

《年齢》 17

《職業》 傭兵

中略

《 I S 適正 》 有り

《適正レベル》A—

《最終予測適正レベル》S—

俺は訳が分からなかった。

頭の処理が追いついていない俺にスカルがこう続けた。

『お前に見せたいものがある。ついてきてくれ。』

そう言うのと近くにあつた車椅子に俺を乗せてとある場所へと連れていかれた。

着いた先はIS用のハンガーであつた。そこには合計12機のISが鎮座している。

色はベースカラーが白の物と黒の物が合計6機ずつ。その中に先日襲われた単眼の黒いISがいた。

驚いている俺にスカルが俺に話しかけてくる。

『EB—AX2機体名グレイズ・アイン。俺の愛機だ。』

俺の知っている先が分かつたのだろう。

『単刀直入に言おう。お前にはうちのIS部隊に入ってもらおう。拒否権はないからな。』

「嘘だろおい！いきなりそんな……」

『あの場で生きる選択をしたんだこのくらいの覚悟はあつただろ？』

まあ別にこちらとしては断つてくれても構わないがここまでの医療費と腕の再生にかかった費用、諸々耳揃えて払ってもらふことになるが？』

「……………、わあつたよ。あんたらに従うよ。」

『まあ冗談だがな。』

「冗談になってねえよ！」

そこから軽口を叩きあっていたふたりだがあまりに騒ぎすぎた為整備士たちから大目玉を食らったのは言うまでも無い。

傭兵 side out

死神 side

傭兵……、もといジンを病室に戻し今後の予定などを伝達したあとスカルは一人喫煙所に来ていた。

髑髏のマスクを外し上着の内ポケットからお気に入りのアメリカンスピリットを一本取りだしライターで火を付け一口吸う。

天井を見ながら紫煙を潜らせていると喫煙所の扉が開く。

そこにはウサギマスクを外したラビットこと篠ノ之束が居た。

「かーくん、タバコは先月辞めるって言ってなかったっけ？」

「束か、別にいいだろ。今日くらいは吸わせてくれたって。」

「そう言っつて禁煙の期日伸ばしに伸ばしたの誰だっけ？」



かーくんこと志村和真はうぐつと変な声を出し啞えたタバコを落としそうになっている。

ちなみに彼の表の姿は世界をまたにかけ展開する世界的企業

RF (RABBIT FACTORY) グループ総裁

つまりは死神旅団の表の顔であるRFグループのトップでもある。

と言っても基本的には死神旅団の方に専念しているので別の人物に影武者をしてもらっている。その為社員登録はIS部門のエンジニアの1人となっている。

ちなみにちなみに束はそのIS部門のトップであるが社内では偽名を名乗り変装している。

「かーくんが吸ってるなら私も吸っちゃお」

そう言つて和真の手に握られた箱から1本タバコを取り出して啞え、シガーキスで火をつける。

「ぐえつ……、やつぱり不味い……」

「いつつもそうなるんだからいい加減俺のタバコ盗んじやねえよ、もったいねえ。

………それで、なにか話があるから来たんだろ？」

「あら、バレた？」

「お前がそうやって俺に構おうとしてくる時は大抵話があるけど少し話しづらいとき

だ。誰も居ねえし話してみろよ。」

「そう言うのと少し暗い表情をした後決心したように俺に話してきた。

「かーくん以外に男性操縦者が見つかったの。しかも世界の明るみに出る形で」

「穏やかじゃねえな。で、そいつは誰なんだ？」

「いっくん……じゃ伝わらないか。織斑一夏。名前は知ってるでしょ？ブリュンヒルデ《織斑千冬》の弟。今年いっくん達高校受験だったの。それで高校入試の合同試験場で道に迷っちゃったみたいで藍超学園の試験会場に向かっていたはずなのに真逆のISS学園の試験会場に着いちちゃったみたいなの。その時適性試験用に搬入されていたISSにいっくんが触れて起動しちちゃったみたい。」

「そう聞くと俺は固まった。かなり動揺したのだと思う。吸っていたタバコも落としてしまったし。」

「……………うそだろ？」

「もしそれが本当なら大ニュースでありこちらとしても動き出す絶好の好機だ。」

「東、そろそろ俺達も表からモーション起こしてみるか。裏からやってたんじやいつも通り亡国との颯ごっこになる。このまま亡国との小競り合いを続けても益になることは何一つない。」

「そう言うと思ったよ。じゃあ東さんはいつでも出られるようにグレイズ達の点検して

くるね。私がかーくんにできるのはそれくらいだから。」

そうやって束が出ていこうとする手を掴み和真の元へと引き寄せて抱きしめる。

「いつも俺のわがままに付き合わせちまって済まないな。」

「いいよ、私とかーくんの仲でしょ？ただ少しご褒美後あると嬉しいかなあ。」

「お望み通りに、お嬢様。」

喫煙所にブラインドが下ろされ中から少し甘い嬌声が聞こえてきたが誰も聞かないことにしていたのはここだけのお話。

織斑一夏の事件より世界は慌ただしくなっていた。

連日報道は彼のことを伝え、世界各国では今まで行われなかった男性へのIS適正検査が行われている。そんな中RFGグループからこんな声明が出された。

『我が社のIS部門に所属する男性職員から新たに4名適合者が発見。開発途中だった機体をそのまま専用機に回す』というものだった。

世界はさらに混沌の渦へと堕ちていくこととなる

## 序章—②—

和真 side

ジンを死神旅団に迎えてからおおよそ2週間が経過した。

その間の出来事を掻い摘んでではあるが説明しよう。

まず1つ目は織斑一夏のニュースに合わせるように公表された

『RFグループの4人の男性操縦者』について。

これはうちのIS部隊12名のうち18歳未満の俺とジンを含めた4名を選抜して公表。織斑一夏と同様に企業代表としてIS学園への入学を決定した。

俺とジン以外の2人に関しては追追話すでしょう。

2つ目は束の存在だ。

所属しているRFグループのIS部門トップが自分であり、今まで偽名で生活していたことを公表した。

束のことが欲しい企業、各国首脳陣がRFグループに説明を要求。

当然束のことを知っているのは死神旅団にも籍を置いているごくごく一部の社員の

みの為、上役たちはてんやわんやになったが束が各国に新たにＩＳコアを提供する代わりに黙らせることに成功する。

少々強引ではあったが秘密裏に行われた裏取引のお陰もあって表面上は丸く覚めることが出来ている。

3つ目にジンのＩＳの特訓を始めたことだ。

案外筋がいいのと元々傭兵をやっていただけあって武器の扱いにもすぐ慣れたようだ。特に近く中距離戦闘が得意だが遠距離もそこそこやれるようだ。

実技はとりあえずどうにかなったのだが問題は座学。

ジン以外の学園に行く男3人に関しては行動を共にしＩＳを触り始めた頃から束にみっちり仕込まれているため今更基礎で転けることはほぼない。

逆にジンは頭に詰め込むのが苦手なようでＩＳ関連の法律や規則などの暗記が終わる頃にはうわ言を呟き目が完全に死人になっていた。

そんな感じで慌ただしく時間が過ぎていくことになるがその前にここで我がＩＳ部隊の面々をご紹介します。

まず男女比率だが男4人、女4人が在籍している。

まずは男性陣から、俺とジンはとりあえず省くとしよう。

ちよようどよく前から歩いてきた茶髪に三つ編み、紫の瞳を持つ男

『デュオ・マクスウエル』である。性格は基本明るくチームのムードメーカー。死神旅団結成時からの古参メンバーであり今回の学園に行くメンバーでもある。

乗機はXXXG-01D『ガンダムデスサイズ』。

基本的には前衛での戦線形成からステルスでの奇襲、挟撃、遊撃。

近接戦闘が絡むことなら何でもござれなトリックスターである。

そのため遠距離武装は最低限のバルカン位のものである

「ようカズ。この後模擬戦でもどうだ？」

『それならジンの稽古つけてやってくれ、今の間に専用機にも慣れさせとかねえといけねえし戦闘時の距離と立ち回りはお前と似てるから教えといてやってくれ。』

「またかよ……、まあいいぜ。確かにペーペーののトーシロー連れてつてもこっちが恥かくしな。じゃあ行ってくらあ」

こんな感じで面倒見のいいところもあるので俺も助かっている。

もう1人に連絡を取ると今シユミレーターに在るとの事なのでトレーニングルームに向かう。

IS用のシユミレーターに向き合う短くまとめられた金髪に青い瞳の青年

『リディ・マーセナス』である。

性格は優しく正義感のある青年であるが戦闘時は荒々しく口調なども正反対になる。性格がきつくなると顔もとんでもなく荒んでしまうため初見の人は大抵ビビってしまうがジンは過去の経験か何なのかは分からないがビビることは無かった。

彼もメンバーの中ではかなり古株で今回の学園に行くメンバーの1人である。

乗機はRX-0B『バンシイ』である。

元々はMSN-001A1『デルタプラス』のパイロットであったがしばらく前に行われた作戦でデルタプラスは大破。別パイロット用に回すはずだった

バンシイをリデイへとまわすこととなった。

「カズマか、ちようどいい。新しいセツティングと武装のチェックがしたいんだが模擬戦頼めるか?」

『おう、お疲れ様。それならシェイクダウンがてらにバンシイでデュオとジンの模擬戦に混ぜてきたらどうだ?俺も後で向かう。』

「そうなのか?わかった、そうすることにしよう。あと真緒たちが呼んでいたぞ。いつも通り食堂で昴たちと飯の最中じゃないか?」

『真緒たちが?わかった、ありがとう。』

「おう、じゃあ後でな。」

そう言い残しリデイは模擬戦用のアリーナへと向かっていった。

俺はリディから聞いた真緒と呼ばれた女性陣のリーダー格を探すことにした。

しばらく基地内を歩き食堂にたどり着いたところで姦しい声が聞こえた。

目をやるとお目当ての真緒と他の女性陣全員もその場に居た。

俺が声を掛けようとするのと黒髪ロングに青い瞳のこちらを向き声をかけてきた。

「あつ、和真！一体どこほつつき歩いてたのよ！」

『すまんすまん、ジンのIS学園に向けての講習してたからな。』

「まあいいけど。あんたらがIS学園行ってる間の指揮系統の話したいからまた後でプリーフィングルームに束さんと来て。」

『わかった。』

『神崎真緒』（かんざきまお）、前述の通りに女性陣のリーダーをしている。

性格はサバサバとしているがしっかり者でみんなから『姉御』や『姐さん』と呼ばれることが多い。

乗機はGF13-001NHII『マスターガンダム』

俺と同じ近接格闘型のためよく模擬戦やお互いの悪い癖などの指摘もしている。

俺と真緒が話している横でプリンを貪っている青髪ショートの元気系女子

『神崎昴』（かんざきすばる）、真緒の義妹にあたり真緒と同じく徒手空拳を主に使用し戦闘に望んでいる。



乗機はGF13-017NJ II 『ゴッドガンダム』

性格は人懐っこくちよつと抜けているところがある。

基本的には何が起きてもドンと構えて周りを鼓舞することが多い為精神的柱のような役目を担っている。

ちなみに真緒と昴は所謂義兄弟の契りを交わしているからである。この場合は義姉妹となるのだろうか？

昴の対面で優雅に紅茶を飲んでいる白髪ロングの女の子

『孤坂フブキ』（こさかふぶき）

性格はしっかり者でIS部隊全員の橋渡しになることが多いがすこしいタズラ好きな面も持ち合わせている。

ミオとは親友同士であり実は裏で付き合ってるじゃね？と専ら噂されている程仲が良い。

あとスイッチがプライベートモードになると重度のオタクを發揮する。

それを知っているのは和真とミオだけである。

乗機はxvm-fzc 『ガンダムレギルス』

元々開発が進められていた機体があったが検査でBT適正が見つかった為急遽ビッ

トを使用出来る仕様の機体として開発されたのがレギルスである。

その隣でおそらく食後のデザートのリンゴを剥いている少しくせつ毛の黒髪ロングの女の子

『狼谷ミオ』（かみたにみお）

性格は基本的にはのほほんとしていてみんなの母親かと言わんばかりに母性を発揮する。

そのためときに怒ると少なくとも死神旅団の中では止められるのは和真以外には居ない。

ちなみに俺たちの中ではツツコミ担当でもある。

乗機はAGE-2DH 『ガンダムAGE2ダークハウンド』

元々の乗機であった『ガンダムAGE2』での稼働データを元に彼女仕様でチューンし直した機体となっている。

基本的に彼女が前衛から遊撃の超至近距離から中距離で機動性を持ち味とし、それを活かせるように小回りが効き尚且つ一撃離脱戦法が取れるだけの火力も両立させている。

以上が死神旅団 I S 部隊のメンバーと乗機である。

一通り彼女たちとの会話を終えジン達が模擬戦を行っているアリーナへと向かう。

そこでは現在デュオのデスサイズ、リディのバンシイ、そしてジンの機体

X M | X 2 『クロスボーンガンダム X 2』

彼の特性上近接戦闘から中距離、遠距離支援もまずまずといった成績のため満遍なく武装を使用できるこの機体となった。遠距離支援用の武装も現在急ピッチで開発中である。

尚俺を含めた男性操縦者に関しては学園に行く際に学園生活用の I S が新たに支給されることになっている。

今の乗機を学園で使用し仮に素性と死神旅団のことが露見するようなことになれば今後の活動どころか身柄も危なくなる。

いずれも操作性や運用法は現在の乗機に寄せているらしいが俺のは絶対に違う気がするが気にしないことにする。

俺には M S N | 0 6 『シナンジュスタイン』、ジンには X M | 0 1 『クロスボーンガンダム X 1』、デュオには R X | 7 8 X X 『ピクシー』、リディには R X | 0 『ユニコーンガンダム』

いずれも性能は折り紙付きで分類は第 4 世代機だ。

ちなみに死神旅団のISは既に全機第4世代に更新されている。

だが最終調整がまだ全機完了していない為IS学園に言っただけはRFグループの第三代量産機である『ジェスタ』を専用機替わりに持つていくことになる。完成次第女性陣が持つてくるらしい。

IS部隊のメンバーを紹介しきったところで時間を少し進める事にする。

和真 side out

男性操縦者4人と付き添いのフブキとミオは男性陣の入学試験のためIS学園に降り立っていた。

校門まで行くと少し癖のある黒髪ロングに細身のスーツを着こなす女性と緑髪にメガネをかけた優しそうな女性の二名が出迎えてくれた。

「IS学園の織斑千冬だ。お前達がRFグループの企業代表とその付き添いか?」

『そうです。RFグループ企業代表筆頭、志道和真です。お会いできて光栄です、初代ブリュンヒルデ。』

「その呼び方はやめてくれ、もう昔のことだ。」

「あなたはそう思っただけでも周りはそうは見えてないってことさ。RFグループ企業代表、デュオ・マクスウェルだ。よろしく頼むぜ。」

「同じくRFグループ企業代表、リディ・マーセナス。」

「同じくRFグループ企業代表、ジン・ナキリだ。」

一通り自己紹介を終えると試験会場まで案内された。

特に特筆すべき事項は無いが強いて挙げるならジンが筆記試験中に知恵熱を出してしばらくダウンしたくらいだ。

どれだけ頭が弱いのかと心配になると同時に良くそれで傭兵やってる時に騙されたりしなかったものだと思う和真だった。

その後ジンはその事を気にして合格通知書が来るまでの数日間何をするにも上の空で訓練中に何度真央の鉄拳でぶっ飛ばされたか。

本人曰く「30回から先覚えてない」だそうだ。

実際のところセキュリティ面や保護の関係で自動的に合格になっていると和真達は知っているが「ちゃんと勉強に集中して欲しい」という理由で黙っているらしい。

本音はだつて？

「反応が面白いからだまつてる」に決まつてるじゃないか。by和真

まあそんなこんなで無事男性操縦者4人はIS学園に入学する事になった。

彼らの学園生活に刻まれるのは青春か、はたまた血塗られた道か。

今はこれからの彼らを見守ることとしよう。

## 1話

和真 side

無事に入学式を終え教室には戻ってきた。

分かっていただけではあったが女子校だったところにいきなり男が混じれば好奇の目で見られて当然だ。

こつちをチラチラと見てはヒソヒソと周りと話していた。

俺たちは特に気にする素振りもなく振舞っていた。

ジンに至っては机に突っ伏して爆睡して鼻ちようちん作ってるし。

1度たたき起こした方がいいのかと考えていた所へ一人の女性が現れる。

入学試験時に織斑千冬の隣にいた緑髪の女性。

「みなさんおはようございます。この1年1組の副担任を務めます、山田真耶です。1年間どうぞよろしくお願いします。早速ですがみなさんの自己紹介をしてもらおうと思います。出席番号順ですので1番の相川さんからお願います。」

順調に自己紹介は進んでいくがとある奴によってその流れはガラリと変わる。

そう、織斑一夏その人である。

「おつ、織斑一夏です……………」

(~~?~~~~?~~~~?~~~~?~~~~?~~~~?~~) ジイイイイイ

《全員から「もつとなんかねえのかよ」と言わんばかりの視線》

「以上です！」

ε 〓 \ / ———— ○ ———— ズコー————

見事に全員ずっこけた。

スパコー————

織斑一夏の頭に振り下ろされる黒い物体を持ったスーツの女性、

織斑千冬である。

威力もさることながら振り下ろされた瞬間が一瞬見えなかったことにRF組の4人は驚愕の表情を浮かべた。

「まったく、お前はまともな自己紹介も出来んのか。」

「千冬ね……………」

「織斑先生だ！」

2 発目の出席簿が織斑の脳天にクリティカルストライクしたところでスタスタと教壇へあがり挨拶を始めた。

「諸君、まずは入学おめでとう。このクラスの担任の織斑千冬だ。この1年間でお前た





「山田先生……、おっと、そろそろ授業だな。」

とりあえず自己紹介は各自でしておいてもらうとして男性操縦者諸君にだけはここで自己紹介してもらおう。志村から出席番号順でやってくれ。」

俺は椅子から立ち上がる。

「志村和真です。RFグループの企業代表筆頭をやらせてもらってます。元々はISの武装面の研究開発をやってました。歳は18。皆さんよりちよつと歳食ってるけど仲良くして貰えると嬉しいかな。趣味は釣りとサバイバルゲーム。嫌いなものは差別的なこと全般かな。他になにか聞きたいことがあったら休憩時間にも。1年間よろしくお願いします。」

間髪入れずさにながが自己紹介を始める。

「ジン・ナキリ。RFグループではほか3人と違って施設の警備部門に居た。歳は17、趣味はバイク弄りかな。なんか聞きたいことがあれば後で聞いてくれ。1年間よろしく。」

「デュオ・マクスウェルだ。RFグループではISのフレーム設計なんかをやってた。歳は18。こつちもジンと同じでなにか聞きたいことがあったりできたりしたら聞きに来てくれ。1年よろしくな。」

「リデイ・マーセナスだ。RFグループではISの整備をメインにやっていた。趣味は読書と乗馬。言い忘れてたが歳は17だ。なにか質問があるやつは質問に来てくれ。1年間よろしく。」

自己紹介を終えて周りを見てみると女子たちは下を向いてプルプルとしている。この時4/5の男は考えと行動が完全にリンクした。

「ヤベえ、また来る」

咄嗟に耳を塞ぐと

『『『きやアアアアア』』』』

教室には2度目の歓声<sup>!</sup>が上がる。

「みんな違ったタイプのイケメン!」

「これだけいれば薄い本がどれだけ分厚くなるか!」

「絡ませ放題よ!」

「神よ!このクラスにしてくれたことを感謝します!」

興奮が抑えられないのか思い思いの言葉を紡ぎ出す乙女たち。

しかし忘れていないだろうか、今がどういう時間で目の前に誰が居るのかを。

そう、授業前のホームルームでしかも目の前には担当教諭がいる。

そこから導き出される答えは1つ。

千冬の右手は高々と掲げられ拳を握り、風を切る音と共に教卓へと振り下ろされた。けたたましい音を響かせ教卓の天板は見事に凹んだ。

その光景に一同は動揺し動きを止める。

千冬は生徒たちに笑顔でこう言い放つ。

「貴様ら、早速罰を受けたい様だな。」

そこからの行動は早かった。

直ぐに授業の準備をして全員が起立し千冬の号令を待つ。

「次は無いからな。では授業に入る。」

一礼してから全員が着席し授業に入っていた。

こんな調子でこのクラス大丈夫かと心配になる男性操縦者陣であった。

その日の授業終わりに織斑一夏が話しかけてきた。

「俺織斑一夏、少ない男友達として仲良くしようぜ。」

「志村和真だ、よろしく。」

俺を筆頭に他のメンツとも挨拶を交わしていく。

軽く談笑していると後ろからポニーテールの女の子が声をかけてきた。

女の子「話しているところすまない、織斑一夏を借りてもいいか？」

和真『ああ、構わないよ。他愛ない雑談をしてただけだ。』

デュオ「俺たちのことはいいいから早く行ってやんな。」

一夏「なんかすまないな。行ってくる。」

そう言つて一夏は俺たちから離れていく。

デュオ「なあカズ、あの子つて」

『ああ、篠ノ之箒だ。束さんの妹の。』

リデイ「てことはあの子が第2の護衛目標だと?」

ジン「早くもエンカウントか。早めに接点作るにはいいタイミングかもな。」

『かもしれないな。基本的には俺が動くがフォローは任せた。』

デュオ「水くせえよカズ。俺たちがそんなに薄情に見えるかよ。」

『それもそうだな。そろそろ授業だ、準備しとけよ。』

その一言で全員が席へと戻っていく。

一夏達は授業開始間際に戻ってきた為千冬に注意されていた。

和真 side out

デュオ side

よつ、俺はデュオ・マクスウエル。

自己紹介はさっきしたから置いとくとして今は篠ノ之箒とエンカウントした後のすぐの授業中。

織斑先生がこんなことを言い出した。

千冬「授業を始める前に先程決め忘れていたクラス代表を決めるとしよう。クラス代表とはいわゆる学級委員のようなものだ。授業前の号令などはもちろん生徒会の会議や学校行事の運営にも携わってもらおうことになる。あとこの学園ならではの学年ごとにあるクラス対抗戦などにも出場してもらおうことになる。尚生徒会役員との兼任は認めない。自薦他薦どちらでも構わん。相談して決めてくれ。」

クラスメイト a 「はい！せっかく男性操縦者がいるんだからここは織斑君を推薦します！」

一夏「おつ俺?!」

クラスメイト b 「いいや、ここは志村くんよ！」

：

：

：

………詳細は省くが俺達男性操縦者全員がクラス代表に推薦されるという事態に

なった。

俺たちはやれやれと言った感じでどうするか考えていると一人の少女が異を唱える。

「納得いきませんわ！このイギリス代表候補生である

セシリア・オルコットを差し置いて男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ただでさえこんな極東の島国に來ているのでさえ耐えられないのに！」

ここに食ってかかったのは一夏だった。

一夏「誰が恥さらしだ！そんなに言うならイギリスはメシマズランキング何年連続でトップとってんだよ！そんなに嫌なら自主退学して国に帰れよ！」

セシリア「なっ！よくも祖国を侮辱いたしましたわね！」

一夏「先にしたのはそっちだろうが！」

まるで小学生の喧嘩で呆れちまうぜ……

そこにカズが挙手をして織斑先生に発言権を求め。

和真「とりあえず落ち着かないか2人とも。まずはM s. オルコット。I Sの開発者ば誰でこの出身かお答え願おう。」

セシリア「何を言いますかと思えば。篠ノ之束博士、出身はにほ……?!」

和真「次に織斑。ローストビーフは好きか？」

一夏「いきなりなんだよ。まあ好きだよ。」

和真「ローストビーフはイギリス発祥の郷土料理だ。他にもスコッチエッグとかも上げられるな。さてMsオルコット、自分の失言に気づいた上で質問させて頂こう。あなたは国家代表候補生でありながら日本に対しての侮辱とも取れる発言をした。これはイギリスが日本に対する宣戦布告と捉えられても文句は言えませんか？」

セシリア「そつ…それは……………」

和真「続いて織斑。ここが学校だからまだ良かったが俺達のいたRFグループなら契約が破談になったり国家間なら宣戦布告に取られるような失言もある。今後は気をつけろよ。」

一夏「……わかったよ。」

とりあえずこの場を収めたカズ。

曲者揃いのうちのIS部隊率いてるだけはあるな。

するとオルコットがこう続けた。

セシリア「決闘ですわ！先程の失言に関しては謝罪致します。申し訳ありませんでした。ですが代表の件はまた別。ISの知識もない方が代表となるのは相応しくないかと。」

和真「ならここにいる他薦組5人とMsオルコットを含めた6人で戦って1番勝ち星の多かったやつに決定権を与えるのでどうだ？いかがですか織斑先生？」



千冬「では6人の総当たり戦と行こう。試合の日取りは今日の放課後に連絡する。それでもいいな？」

6人ともが頷く。

千冬「では授業に入る。」

その後の授業はなんの問題もなく進行していった。

途中一夏が入学前必読の参考書を誤って捨てたことにより織斑先生からキツイ一発を貰っていた。

さらに再発行された参考書を1週間で覚えた上で同時にレポートも課されていた。出鼻からハードモードだが頑張ってもらおうとしよう。

デユオ side out

---

和真 side

その日の終わりのSHRで代表決定戦の日取りが1週間後となった。

その場で男性操縦者5人にはSHR終了後隣の空き教室へ集まるように指示があった。

大方寮の部屋割り等の話だろうと思っていたがその通りだった。

まずは寮内のルールなどの簡単な説明と大浴場が使用不可である事を聞き最後に部

屋割り発表となった。

かなり強引にねじ込んだ様でこのような部屋割りになっていた。

ジン・ナキリ、デュオ・マクスウエル〈3年生寮3048号室

織斑一夏、リディ・マーセナス〈2年生寮2021号室

志村和真、他女子一名〉1年生寮1026号室

部屋のカードキーと寮の見取り図を渡し、帰りに事務室へ寄るようにと伝えると千冬は会議があると言って足早に教室を出ていった。

あまりのことで頭の処理が追いつかず質問をすることすら出来なかった。

『まじかよ……』

デュオ「まあ良いじゃねえの。役得だと思って生活して見りやいいんじゃねえか？」

リディ「何かあればあの人に報告するだけだ。」

『何もしねえからそれだけは勘弁な!?俺殺されちまうよ!』

一夏「とりあえずルームメイトに事情を説明して部屋替えしてもらえばいいんじやないか?」

ジン「それが無難だろうな。とりあえずここにいても始まんねえし部屋行こうぜ。1  
8時に食堂で待ち合わせよう。」

『一夏の案が無難だな。とりあえずはそうしよう。ジンの意見に賛成だ。』

一夏「わかった、じゃあまた後で。」

そのまま部屋を出ていく5人。

重い足取りのまま部屋にたどり着く。扉をノックするが特に返答がなかった為カードキーで鍵を開けたが電気が着いておらず誰も居ないことが分かった。

部屋に入り机にカバンを置くと事務室で受け取った俺の荷物からジャージに着替えて暇つぶしがてら学園内をランニングすることにした。

1時間程走り、汗を流そうと荷物から入浴セットを取り出して浴室への扉を開ける。

この時に少しでも配慮の心があればこの事故は回避出来ただろう。

扉を開けるとそこには黒髪ロングの少女、『篠ノ之箒』が居たのだ。

お互いに見つめあったまま少し時間が流れる。

先に動いたのは和真だった。

気をつけをし深深と頭を下げる。

『事故とはいえ申し訳ない。後で制裁でも何でもしてくれ。その代わり俺もシャワーを浴びてからでも構わないか?』

箒「……………わかった。一旦出てくれないか?これからあがるから。」

『わかった。』

10分ほどすると道着と思わしき服装に身を包んだ箒が浴室からでてきた。

気まずい空気が静寂を作り出す。

その静寂を破ったのは箒だった。

箒「……こちらにも落ち度はあった。荷物があつたのを確認していたのに不容易に入浴などするものではなかった。だから今回はお互いの不手際ということでも何もなしで手打ちにしよう。」

『そう言つて貰えるところからも助かる。じゃあ改めて自己紹介を。志村和真だ。とりあえず強引にこの部屋割りにねじ込まれたらしいからすぐに変えてもらうように相談するよ。その間よろしく。』

箒「篠ノ之箒だ。呼ぶ時は箒でいい、苗字はあまり好きではないのでな。ちゃんと節度さえ守ってくればこちらとしては構わないが確かに年頃の男女が同じ屋根の下というのもまた問題か。」

『俺の精神削るようなこと言うのやめて欲しいかな』

俺は苦笑いをうかべる。それを見て笑う箒。

なんだろう、束と話してる時に近い感覚だ。

この落ち着く感じ、性格はまるつきり逆っぽいのに。

やはり姉妹だからだろうか。

その後部屋の使い方などを話し合っているとデュオたちとの約束の時間の10分前となっていた。

せつかくなので箒も誘うと了承してくれた。

その後食堂へ向かい6人で楽しく飯を食った。

その中で一夏が俺達にI Sの使い方方を教わりたと言ってきた。

俺達は構わないと言ったが箒がこう問いかけてきた。

箒「志村いいのか？これでは敵に塩を送ることになるが。」

『確かにそうなるな。』

デュオ「たった1週間ぼっち特訓したところで俺達には勝てんよ。」

箒「えらく自信満々なのだな。」

『これで負けてちゃ俺たちに企業代表譲った先輩達にカツコつかねえよ』

リデイ「それに下手な操縦で怪我をさせたり逆にしまったりしたらこっちも目覚めが悪い。そうならないためにもサポートはさせてもらおう。」

一夏「言い方はカチンと来るが言われていることは正しい。I Sを動かしたのだから受験の時の誤爆と入学試験のテストだけだ。経験なんて雀の涙なんてものですら多い位しかない。だから少しでも俺に戦う術を教えて欲しい。」

箒「一夏……、私からも頼む。幼馴染として助けてやりたいが生身ならいざ知らずI

Sとなると経験不足もいい所だ。だから手を貸してほしい。」

一夏は頭を下げ、それに続けて箒も頭を下げた。

それを見た和真達は顔を見合せてやれやれと言った表情を見せると和真が口を開く。

『じゃあ授業料を貰うとしよう。』

一夏「金取るのかよ?!」

ジン「ちげえよ、手前から言い出しといてそんなこたしねえよ」

デユオ「この学園在学中に俺たちに一度でも勝ってみろ。模擬戦だろうと学園の催し物でもなんでもいい。とりあえず俺たちの誰かに黒星を付けてみる。」

リデイ「簡単だろ? 3年間も返済期間があるんだ。ただ俺達も止まる気はねえから年々難しくはなるだろうが確実に強くなれるぜ?」

一夏「一見軽そうな借りだけどすごく重い借りを作ってしまったかもしれないなこれ。けどそんなことも言ってもらえねえ。明日からよろしく。」

箒「訓練するのはいいがISとアリーナの使用申請は大丈夫なのか? 今日のホームルームで言っていた気がするが。」

デユオ「それに関しちゃ問題ないぜ。元々こつちから特訓の話を吹っかけるつもりだったんだ、今週いっぱい俺らでアリーナひとつと訓練機一機は貸し切ってる。」

『とりあえず第3アリーナを貸し切ってるからホームルームが終わり次第集合な。』

一夏「わかった。改めて明日からよろしくな。」

話が纏まったところで再び談笑しながら夕食をとった。

翌日から始まった一夏の特訓は壮絶を極めた。

後にこの時の訓練のことを一夏と箒に聞いてみると口を揃えてこういった。

「訓練をしてくれたことには感謝するがあの時だけは4人が悪魔に見えた。」

内容について突っ込んで聞いた者がいたが2人が震えだした為聞くのを断念したそう  
うだ。

## 2話

side 和真

一夏から特訓の申し出を受けた日から1週間が経過し、クラス代表決定戦当日となった。

俺は一夏、ジンと同じピットで待機しているがここでひとつ一夏に問題が発生している。今日の午前中には届くはずだった彼の専用機が納期を過ぎても届かないのである。

RFGグループという有数の企業に在籍しているだけあってこういうことにはとても敏感な和真である。

一夏「いつになつたら来るんだよ……。初戦は俺だつてのに……」

箒「焦つても仕方なからう。急いで事は仕損じると言うし今はとにかく待とう。」

『……………仕方ない。俺の試合を繰り上げるか。織斑先生に頼んでくる。』

ジン「アッブとかは大丈夫か？」

『とつづくに終わってるよ。』

俺がピットを出て管制室に向かおうとすると扉が開いて織斑先生が入ってきた。

千冬「すまない志村。倉持技研からまもなく到着すると連絡が入った。フィッティン



グなどの時間を考えるとかなり時間が押すため初戦とお前とオルコットの試合を入れ替えても構わないか？倉持技研には後ほど抗議を入れておく。」

『構いませぬよ。なんでしたら今からその打診をしに行こうとしていたところですよ。すぐに準備しますね。』

俺はそそくさとカタパルトデッキに向い専用機代わりのジエスタを纏った。

カタパルトに乗ると管制室の山田先生から通信が来た

真耶「テストテスト……。志村くん、通信は聞こえていますか？」

『山田先生、問題ありません。いつでも発進できます。』

真耶「了解しました。カタパルト展開、発進シーケンスに移行します。進路クリア、システムオールグリーン。発進タイミングを志村和真くんに譲渡します。」

『I have a control. 志村和真、ジエスタ出るぞ！』

勢いよくアリーナへと飛んでいく。

アリーナではすでにセシリアが待機していた。

セシリア「あら、織斑さんではありませんのね。」

『残念ながら最初のダンスの御相手は俺だ。織斑の専用機が開発元からまだ届かなくてな。とりあえず俺が先に出てきた次第だ。』

セシリア「それに全身装甲のISとはまた古典的なものをお使いのようで。このセシ

リア・オルコットを舐めていらっしやるの？」

『……今なんつった？』

セシリア「何度でも言っただけで差し上げますわ。そんな古臭い全身装甲のISで出てくるなんて。わたくしを舐めてると言っているのです。」

『……よしわかった、あまり乗り気じゃなかったが気が変わった。お前は徹底的に潰すでしょう。』

セシリア「なっ、なにを怒っていますの？今どき全身装甲のISなんて骨董品の第1世代に数機いた程度ではありませんか！それを古臭いと言っただけが悪いのです！」

『お前は自分の乗っている機体を馬鹿にされて黙っていられるのか？1度本格的に教育してやらないといけないようだな。』

セシリア「その減らず口がどこまでもつか見ものですわね。一瞬で沈めて差し上げます。」

『5分だ……』

セシリア「はい……？」

『5分間は攻撃しないで置いてやる。お前が侮った機体の性能を見せた後じっくり料理してやる。』

真耶「では第1試合、始めてください！」

ここにIS学園での初めての戦闘が始まった。  
和真side out

リデイス ide

よう、俺視点は初めてだな。リデイ・マーセナスだ。  
かず

デュオ「あああ、我らがリーダーがキレていらっしやる。」  
リデイ「ジエスタは俺たち3人の子供みたいなもんだ。馬鹿にされてキレるのも無理もない。実際俺も少し腹に据えかねているからオルコット戦は瞬殺で勝負を決めるつもりだ。」

デュオ「大人気ねえなあ……まあおれもあんまりいい気分じゃねえからちつとばかし痛い目みてもらおうかね。」

セシリアの預かり知らぬところで死刑宣告フラグが2件立ったのは言うまでもない。  
ちなみにジンの方もなんかムカつくから1発ぐるとのこと。

一方試合の方に目を向けると

セシリアが乗機であるブルー・ティアーズの主武装であるライフル「スターライトM ark III」で狙撃しそれを最小限の動きで回避する和真のジエスタという構図であ

る。最初こそしっかり狙っていたが3分を過ぎたあたりからどんどん狙いが甘くなり4分をすぎた今では狙撃と言うよりは乱射に近い撃ち方になっている。

セシリア「どうしてあたりませんの……?!」

和真『狙いが正直すぎるんだよ。早くしないと約束の5分までもう1分もないぞ?』

セシリア「仕方がありませんわ。行きなさいティアーズ!」

セシリアの背部から出た4つの光。

和真はその正体を察知しすぐさま回避行動に移る。

『まさかこんな所でビットとやり合うとはな!だがフブキのビットに比べれば!』  
的確に回避し避けられない物はシールドでガードしている。

セシリア「私を忘れてもらっては困りますわ!」

和真の意識がティアーズへと完全に向いた瞬間を狙ってセシリアのライフルが火を吹いた。

頭部への直撃コース

ビットの攻撃で避けきれないかと思われたその時和真のビームライフルも火を吹き狙撃を相殺し最小限の射撃でビットを落とす。

セシリア「攻撃しないのではなくて?」

『約束の5分は経ったのでな。今度はこちらから行かせてもらおう。』

腰にライフルをマウントし左腕にマウントされたビームサーベルを抜く。

盾を構えてセシリアへと突貫する和真。それを黙って見過ごすセシリアではなかった。

セシリア「そんなまつすぐの突進だけで怯むとお思いなら舐められたものですわね！」

『そう言うのは一発でも俺に当ててから言うんだな！』

突進の途中でセシリアに向けてシールドをぶん投げた。

突然のことにセシリアは盾を撃ち落とそうとライフルを向けた。

特に驚く様子もなく和真はジェスタの腰部からグレネードが発射する、照準は先程投げたシールド。

ジェスタのシールドにはミサイルランチャーが内蔵されている。

ここでひとつ考えてみよう。

爆発物の近くで爆発が起きればどうなるか？

誘爆だ。

シールドがド派手に爆ぜ砕けた破片が両者を襲う。

セシリアは無意識に腕をクロスさせ防御姿勢をとる。普通の人間なら当然の反応だ。だがこの反応が明暗を分けることとなる。

防御姿勢をとったことにより和真から完全に意識を逸らしてしまった。爆煙が収まらぬ中すぐにハイパーセンサーで和真の位置を探る。

反応は自分の真後ろにあった。

その直後後ろから何かに押され地面へと叩きつけられ組み伏せられる。

和真のジエスタである。

じたばたと暴れるセシリアにマウントしておいたビームライフルをセシリアの頭へと向けこう言う。

『チエックメイトだ、お転婆娘。』

それを聞きセシリアも悔しそうな表情を浮かべ暴れるのをやめてこう告げた。

セシリア「セシリア・オルコット、遺憾ながらこの勝負………《リザイン降伏》致します………」

千冬「試合終了！勝者、志村和真！」

さて、次の試合は俺だ。準備に入るとしよう。

リデイスサイドアウト

和真side

会場は何が起こったのか把握出来ずにいる。

アナウンスを聞き和真はセシリアの拘束を解き手を差し伸べる。

その行為に鳩が豆鉄砲食らったような顔をしているセシリア。

焦れなくなったのか和真の方から手を取り引き上げる。その時少し勢いをつけすぎたのかセシリアを抱き留める形となりスタンドがざわめく。

状況を理解出来ないセシリアは頬を赤く染めて上目遣いのジト目で和真を見つめる。

セシリア「紳士としては少し強引ではありませんか？」

『そう言われると耳が痛いな。』

セシリア「構いませんわ。それともう離していただいで結構ですわ、それともこのまま責任取って頂けるんですの？」

少し妖艶な表情を浮かべ和真を見つめる。

『知り合つて間もないのにそういう事を言うのは淑女としてどうなのかとは思わず。』

セシリア「あら、淑女ではなくてお転婆娘と言ったのは貴方ではなくて？」

『そう言えばそうだな。Msオルコット、今回の件はお互いさっぱり水に流そう。ここから先はいい学友として接して欲しい。』

そう言つて握手を求め。

セシリア「学友……、まあ最初ですしそれでいいですわ。それとこれからはセシリアとお呼びくださいませ。」

握手に答えるセシリア。

その後お互いのピットに戻ると一夏のISが到着しており初期設定が急ピッチで進められていた。

『やつと来たんだな、なかなか良さそうな機体じゃないか』

一夏「おつかれ和真。《白式（びやくしき）》って言うらしい。にしてもさっきの戦いだけどさすがにどうかと思うぜ？女の子組み敷くなんて。」

『訓練の時に言ったはずだぜ一夏。俺たちが扱っているのは玩具じゃなくて兵器だ。それを身に纏っている以上お互い死ぬ覚悟を持って扱わなきゃならない。それにセシリアは俺の琴線に触れた。少しやりすぎたとは思いますが俺は謝らない。』

ジン「やっぱこいつ怒らせるのヤバいわ。」

『何か言ったか？』ギロリ

ジン「イエッ、ナンニモナイデスヨダンナ」ブルブル

一夏「片言になってんぞジン。さて、俺の方もそろそろアリーナで軽く白式の慣らしに移るか。」

『おう、頑張れよ。』

そういつて一夏は白式を纏いカタパルトから射出されていく。

すると箒が心配そうな顔をして俺に近寄ってくる。



箒「一夏は勝てそうか？」

『ジンを除いた俺たち3人に勝てる確率は1割つてところだろうな。得物次第ではジンには3割、セシリアには五分五分と言ったところか。』

箒「いくら特訓したとはいえ最初はこうなるか。」

『まあ俺の個人的な見解だから見る人が見れば多少は変わるかもな。』

箒「……………ありがとう。」

『へ？』

箒「まだちゃんと礼を言えていなかったからな。同じクラスの級友とは敵同士。見捨てられても文句は言えない状況にも関わらずこちらの頼みを聞き入れてくれた。それに今だって私の質問にも遠慮なく答えてくれた。下手に繕った答えを言われるより好印象だ。」

『……………特訓に関しては俺たちが言い出したことでもある。今答えた勝率だってただの個人的な見解だ。別に礼を言われたりする覚えはないよ。』

そういつてそっぽ向いてしまう。

そんな和真の背中から何故か目が離せなくなってしまう箒。

その背中になんとなくの懐かしさを覚えたのは幻覚かそれとも…。

その後つつがなく試合は続きおおよそ和真の予想通りとなった。

ちなみに1番勝ち星を稼いだのは和真である。

和真 side out

翌日の朝のホームルーム、和真がクラス代表の指名を行った。

『俺が指名するのは一夏。お前だ。』

一夏「ええっ?!俺誰にも勝ててないのにいいのか?俺よりも強い和真たちの誰かがやった方が良くないか?」

『クラス代表は言わばクラスの指標。お前が負けたり不甲斐ない結果を出せば俺たちクラスメイトの顔に泥を塗ることになる。だからこそここでお前を指名した。緊張感があつた方がお前も修練に身が入るだろ?あの契約にも早く近づけるかもな。』

千冬「志村の言う契約というのは気になるが言っている事は最もだ。拒否権もないし気張ることだな。」

一夏「うぐっ……、わかりました。俺やります。」

真耶「話も纏まったところでクラス代表は織斑君に決定しました。一つながりで縁起が良さそうですね。」

麻耶の一言の後チャイムがなる。

千冬「さて、予鈴だ。しっかり授業の準備をするように。では代表、号令を。」

こうして無事クラス代表も決まり入学早々の一悶着は収まった。  
しかし次の嵐はすぐ近くまで迫っていることをまだ誰も知るよしもなかった。

## 3話

和真 side

クラス代表決定戦よりしばしの時は流れたある日相川さんが一夏に話しかけて来た。

相川「ねえねえ織斑くん知ってる？2組に転校生来るんだって！」

一夏「へえ、こんな時期に珍しいな」

セシリア「私のことを危ぶんで急いで編入を決めたのでしょうか。仕方ありませんわ。」「恐らく違うな。代表候補生なら専用機の調整とかで遅れることもあるだろう。そうではなくても今年は俺たちみたいいな特異例があるし各国も注目せざるを得ないんだろうな。このまま学級代表交代なんて事にならなきやいいが。」

デュオ「そういやそろそろ学級代表戦だったよな？幾ら代表候補とは言え流石にねえだろ」

小柄な女の子「ところがぎつちよん、有り得るのよねそれ。」

教室の入口を見るとツインテールの小柄な少女がいた。

一夏「鈴、鈴なのか?!」

鈴「そうよ、もう幼なじみの顔忘れたわけ？」

『知り合いか?』

一夏「ああ、小5から中2の終わりまで一緒に過ごした仲だ。こんな形で再開するとは思わなかったけどな。」

鈴「私は嵐 鈴音。中国の代表候補生兼新たな1年2組のクラス代表よ。あんた達はその他の男性操縦者ね。」

『RFグループ所属、志村和真だ。挨拶したいのは山々だが後ろは見た方がいいぞ。』

鈴「へ?」

鈴音が振り返ると少し呆れ顔の千冬がいた。

千冬「嵐、旧友と話すのもいいがそろそろ予鈴だ。教室に戻れ。」

鈴「(時計を確認)そうですね、失礼しました。一夏、昼休み食堂で話しましょ。出来れば志村たちも。」

一夏「了解だ、また後でな。」

『こちらも了解だ。先に来た方が席を確保するでしょう。』

鈴「OK、それじゃあね」

〈閑話休題〉

時間は流れ昼休み、俺たちが各々の昼食を手に鈴を探していると席をとりラーメンを

啜りながら待っていた。

鈴「遅かったわね、麵が伸びちやうから先に頂いてるわ。」

『すまない、人混みをなかなか抜けられなくてな。とりあえずいただこう、話はそれからだ。』

各々昼食を摂り雑談へと移行していく。

一夏「にしても鈴、いつこつちに来たんだけ？」

鈴「昨日着いたばかりよ。それより一夏、あんたクラス代表になったってほんと？」

一夏「ああ、色々とあつて俺になった。」

そう言つてジト目で見えてくる一夏。

『おいおい、そんなジト目で見えてくるんじゃないやねえよ。あの時試合の勝者が代表の指名権を得るつて織斑先生に尋ねた時文句言わなかつただろうが。』

一夏「うぐっ……」

そう言つてニヤニヤ笑う鈴。

鈴「なるほど、そういう事ね。試合して勝つた志村に指名されたと。そりや文句言えないわね。私が鍛えてあげようか？」

箒「それは遠慮させて頂こう。二人も師を持つのは今の一夏には無理だろうしな。」

鈴「なんで外部のあんたが断つてんのよ。てか誰？」

箒「そういえば名乗っていなかったな。篠ノ之箒、小学四年まで一夏と過ごしていたものだ。」

鈴「ふーん。で、その私より前の幼馴染さんがなんで断ってきた訳？」

箒「仮にも一緒に時間を過ごした幼馴染だ。それなりに性格なんかは分かるつもりだ。それに志村たちに加えて凰にまで教えを乞うとなれば体も頭も追い付かんだろう。」

一夏「えらく辛口の評価ですな箒さんや。」

箒「反論できる場所があるなら聞きたいものだな。同じく志村たちの訓練に参加した者として言うがあれに追加で誰かの訓練などできたものではない。」

『なんかこつちまで *dis* られてんだけど。』

リディ「まるで俺たちが鬼みたいじゃないか」

箒、一夏「あの訓練を素人にさせる時点で鬼だと思うよ俺（私）は」

鈴「相当扱かれたみたいね……。その様子だとあなたの言い分も間違いじゃないようだし引き下がってあげる。その代わり代表戦のあとから私も訓練に参加しても良い？」

『構わないぞ。代表候補生には生ぬるいかもしれんがな』

鈴「後で私が本国でやってたメニニュー教えましょうか？」

『是非とも頼む。最近マンネリ化してきているところがあつたから丁度いい。』

このあとは他愛ない雑談が繰り広げられ昼休みが過ぎて行く。

時間は進んで現在20時を少し回った頃。

俺は日課のランニングで寮の周りを走っていた。

そろそろ自室へ戻ろうと角を曲がるとすぐ近くのベンチに座る人影が見えた。

『こんな所でなにしてんだ？ 嵐。』

顔を上げた鈴は目を赤く腫らし頬には涙がたまった跡がある。

目を擦りジト目でこちらを見てくる鈴。

鈴「何でもないわよ。」

俺は鈴の隣に座る。

『大方一夏の関連だろう？ 知り合ってまだ日は浅いがあいつが結構な鈍感ってのは分かる。その感じだと昔に告ったけどそれを告白とすら思ってたなかった感じか？』

鈴「……まあそんなとこよ。あいつの鈍感さは知ってたはずだけどここまでとは思ってなかったわ。」

『……そいつはご愁傷さまだな。』

鈴「日本に『毎日お味噌汁を作ってくれ』ってのがあるじゃない？ 私の得意料理が酢豚だからそれを振って『毎日私の酢豚食べてくれる？』って言ったのよ。それをあいつ



『酔豚を奢ってくれる』と勘違いしてたのよ。むかつ腹たつて頬引っぱたいて逃げて来ちゃった……』

『……そいつはひでえ。手が出たのも悪いがこりや全面的に一夏が悪いな。』

鈴「でしょ！思い出したらまたムカついてきた。こうなったら代表戦でポッコボコにしてやるんだから！」

この時和真には鈴の背中に真っ赤な炎が見えたと言う。

この時少し悪戯心が沸いた和真は少し入れ知恵をしたのを追記しておく。

そんなこんなで時間は流れクラス代表戦当日となり俺は観客席で待機していた。

一夏は初戦から二組のクラス代表である鈴と当たっていた。

リディ「さて、この一週間また一夏を扱いた訳だが付け焼き刃のあんなもの役に立つのか？しかもふたつも」

『あれのことか？あくまでけん制だ。当てれるなんて思っちゃいねえよ。1つは割かし勝ちに行かせたがもう片一方はそれに当てるのが目的じゃないしな。』

箒「まあ普通に考えてこの一週間であんなもの仕込むとは誰も思わないだろうな。ましてや剣一本という情報で止まっているのであれば尚更な。」

ジン「にしてもよく本社から取り寄せられたな。確かあれまだ試作型だろ？しかも他

社の機体に載つけて大丈夫なのか？」

『その辺はちやんと一夏にも織斑先生達にも確認して了承は取つてある。それにこつちの事情もあるから試合は拮抗してくれた方が面白い。』

雑談に耽つているとアナウンスが入る。

《これより1年生のクラス代表戦を行います。組み合わせは現在スクリーンに表示している通り、形式はトーナメント戦。第1試合1組対2組。第2試合3組対4組、第3試合3位決定戦、第4試合決勝戦で進めます。制限時間は20分、勝敗は撃墜または時間切れになった段階でのS Eの残量の多い方を勝者とします。ルールは以上、第1試合の選手は入場してください。》

アナウンス後、まずは鈴がカタパルトから飛び出して来る。その後すぐに一夏がカタパルトから飛び出して来る。だがここで白式の見た目を1度でも見た事がある者なら1発で違いに気がつくだろう。

ウイングバインダーに見慣れない柄と腰に2丁の白と黒の銃身の下に刃のついたハンドガンが収められていた。

鈴「ちよつと！装備変わつてるじゃない、聞いてないわよ！」

一夏「ここしばらく和真達に扱きに扱かれたからな。こういうのも面白いだろ？」

それと鈴、もし俺が勝つたらこの前ひっぱたかれた訳とあれの意味教えてもらうから

な！」

鈴「上等よ、そんな付け焼き刃で私に勝てると思ってるなら今すぐ投了しなさい！」  
舌戦を繰り広げると両者は睨み合い観客席のボルテージは最高潮となる。

鈴は自身の得物である双天牙月を拡張領域から取り出す。それに対し一夏はまずは腰のハンドガンを握る。

鈴「あくまで新装備でやるってわけね。それ使って吠え面かいても知らないわよ」

一夏「そつちこそ付け焼き刃の技術で落ちて吠え面かくなよ！」

一夏が言い終わると同時にブザーが鳴り2人にとっての決戦の火蓋が切つて落とされた。

## 4話

一夏と鈴の試合後始まり2分程経過した。

下馬評通りに行けば鈴の勝利は揺るがないだろう。

だが現実はず違っていた。

青龍刀を振り回しながら突っ込んでくる鈴。

それに対して的確に牽制射撃で応戦し、距離を詰められたなら即座に持ち方を変え銃身の下の刃で受け流して軽い斬撃で装甲を削りながら鈴の得意な距離に入らないようにする一夏。

試合は五分五分より若干一夏寄りと言った所となり会場は騒然となっていた。

鈴「ちょこまかと！正々堂々と打ち合いなさいよ！」

一夏「そんなデカイ得物相手に嫌だっつもの！ただお前の速さに目が慣れてきた頃だしそろそろやるか！」

一夏は一層鈴から距離をとると腰のホルスターにハンドガンを収め、両のウイングに仕込まれた柄を握る。

引き抜かれたそれには決定的なものが不足していた。

刀身である。

鈴「あんた舐めてんの？」

一夏「お楽しみはこれからだぜ。」

そう言うのと2本の柄を組み合わせて大きな柄を作る。

すると柄の先から黄色い光が出現しやがて片刃の大きな刃を作る。

鈴「ビームサーベル?!なんつう出力つ………てかそもそもサーベルってデカさじゃないじゃない！」

一夏「和真いわくバスターソードらしいぞ。まあそれはさておき第2ラウンドというぜ！」

一夏は白式のスラストを全開にして鈴へと突っ込む。

鈴は慌てること無く受け流すがさすがに全力で打ち込まれた衝撃があつた様で体制を崩し高度を下げた。

それを見逃さず一夏はバスターソードを構えて突貫。

鈴に向けて振り下ろされようとしたその時丸みを帯びたシルエットが幾つもありナノのバリアを突き破ってくる。

鈴「なっ?!」

一夏「なんだあの丸っこいの!？」

波乱の幕は切つて落とされた。

一方ドームが破られる少し前。

和真たちは一夏の成長ぶりに舌を巻いていた。

箒「信じ難いな……、少し前まで銃なんて扱ったことのない一夏があそこまで……。」

ジン「俺たち総出で育ててんだ。そうなつて貰わなきゃ困る。」

リデイ「動きながらの射撃に関してはまだまだだ。まあ一応の牽制にはなっているから今回に関しては及第点と言ったところだな。」

和真「それに剣術とあの銃の扱いに関しては俺が叩き込んでいる。そんじよそこらのやつには負けんさ。ただまだまだ危なっかしいがな。」

デュオ「攻撃の受け流し方もまだまだだ。あんな流し方じゃいつかでかいの貰っちゃうぞ。まあ今回に関しては何とかなつてるようだがな。」

各々が一夏の総評をしている中、和真達の待機状態のジェスタに通信が入る。

《IS学園に接近する機影多数有り。照合の結果、亡国の運用するマンロデイと断定。推定目標は織斑一夏への威力偵察、もしくは誘拐と見られる。注意されたし。》

4人がメッセージを読み終え顔を見合せた直後バリアは破られ、マンロデイがアリーナ内になだれ込んでくる。

おおよそ数は10。

当然この様な自体になればパニックが起き我先にと観客席の生徒たちは出口へと向かう。

しかしなぜか防火用のシャッターが降りており外に出ることが出来ず更に混乱が大きくなる。

和真「えげつねえことするぜ奴さんは。」

デュオ「この感じだとシステムもロックされてて手動でも開かねえだろうな。」

案の定教員が手動でシャッターを開けようとするが開かない。

ジン「で、こつからどうする大将、正直やることは決まってると思うが。」

リディ「俺とジンで避難経路と誘導、カズとデュオで中の奴らの掃討つてところだな。

さっさと始めようぜ。そうしないとさらに混乱が大きくなるし怪我人どころか殺到してる人で将棋倒しで死人も出かねない。」

和真「とりあえずリディの策で行こう、避難誘導が済み次第アリーナに合流だ。」

和真は管制室の千冬へと通信を送る。

千冬「志村か！」

和真「織斑先生、俺たちで避難誘導と中の救援に向かいます。」

千冬「そうしてくれると助かる。あまり褒められたことではないがな。こちらから何

とかシステムのハッキングを止めようと試みているがまるで歯が立たん。オマケに鎮圧に動いた教員部隊もアリーナ上空で中のヤツの同型に足止めされていて動けんときた。専用機持ちを中心に最善で行動してくれ！」

和真「了解しました。」

通信を切ると各自にアイコンタクトを送り自身はリミッターをカットしたビームサーベルでシールドを切り裂きデュオと共にアリーナの中へと入っていく。

中では必死に逃げ回る一夏と鈴の姿があった。

鈴「いきなり割って入ってきたと思つたら攻撃って何考えてんのよあのずんぐりむつくり！一夏、残りのSEは？あたしであと半分つてとこよ。」

一夏「んな事言つてもどうにもならねえだろうが！あと4割つてとこだ。このままじゃジリ貧もいとこだぜ。残弾もだいぶ少なくなってきた。」

愚痴りながら両手のハンドガンのリロードを行って少し気が戦闘から逸れた一夏に死角から迫る2機のマンロディ。

鈴「一夏、下！」

一夏「マズっ！」

身構えた一夏の間割って入りマンロディを止める黒い影が。

和真「遅くなった。救援に来たぞ。」



デュオ「主役は遅れてやってくるってね！」

一夏「和真！」

もうひとつの黒い影（デュオ）は手に持ったビームサイスで和真が止めているマンロ  
ディを腰の辺りから横に一閃、重力に従って落下していく。

一夏「人が乗ってんのになんて事してんだ!？」

和真「良く見ろ、あれは無人機だ。」

一夏と鈴が落ちた機体に目をやると液体が漏れ出ているがそれは血ではなくオイル  
のようだったことに加え断面から見えるのは肉ではなくコードや基盤といったどれも  
人間に備わっているはずのないものたちだった。

鈴「てことはこいつらぶっ壊しても無問題ってわけね!？」

和真「そういうことだ、とりあえず確実に数を減らす。俺とデュオがが囷になって気  
を引くから2人で遊撃。外の救援に行ったりディ達の合流後一気に叩き潰すぞ。ただ  
しその前に一夏達はどちらかがSE2割を切った時点で俺たちが入ってきた穴から退  
避、こじ開けた防火扉からアリーナ地下のシエルターへ避難すること。」

一夏「何言ってるんだ！俺達も最後まで……」

鈴「わかったわ。」

一夏「鈴！お前まで！」

鈴「一夏、これはもう試合でもなんでもないのでよ！中途半端に私達がいてSE切れにでもなつてみなさい！丸裸の私たちを守りながら志村達は戦うことになる！邪魔になるってことよ！」

一夏「でもよ！」

和真「俺たちが信用出来ないか？」

一夏「……………、分かった。」

そこからの動きは早かった。

軽く小突かれたマンロディ達は俺とデュオに釣られアリーナの外壁沿いに誘導され、一夏と鈴が確実に1機ずつ落としたりディ達が合流する頃には丁度最後の1機が撃墜されるのであった。それと同時に一夏の白式のSEが2割を切った為鈴に連れられシエルターへと避難して行った。

状況の報告をするため管制室へと通信を千冬へと繋げる。

和真「織斑先生、状況完了しました。警戒の為先生方の到着までアリーナに留まりま  
す。」

千冬「すまん、そうしてくれ。そしてよくやつてくれた。教員に引き継いだら学園長  
室まで……………」

そこから先はアリーナで起きた衝撃音により掻き消えることになる。

衝撃で舞い上がった砂埃が晴れるとマンロディの親玉のような機体がハンマー片手に鎮座していた。

千冬「志村！何があつた！」

和真「新手です。早めに先生達を寄越してください。」

そう言うと一方的に通信を切り即座にデュオ達のプライベートチャンネルを立ち上げる。

ジン「なんだあのカエルと亀が合体したような奴。」

和真「あれはASW—G—11《ガンダムグシオン》だ。俺らの所で作って強奪された内の1機だ。」

リディ「こんな形で我が子同然の機体と再会することになるとは、なんて皮肉だよ。」

デュオ「ボヤいてても仕方ねえよ。来るぜ。」

そんなことを言っているとグシオンのカメラが光りハンマーを振り回しながら和真達に向けて突進してくる。

ジン「巨体の割には速いな！」

デュオ「フレーム設計の時からスラストーマシマシにしてたがパクられてからさらに増設されてるなありゃ。」

和真「各機散開して各関節部を集中して攻撃！俺が注意を引く！」

3人「了解！」

先程同様和真が囷となりまるで闘牛士の如くグシオンの突撃を躲す。

そこに出来た隙を見逃さずデュオたちはビームライフルなどの射撃武器で関節部やスラストアーを1つづつ破壊し確実に追い詰めていく。

しかしここに来て誤算が生じる。

和真達が突入する際こじ開けたシールドの穴が偶然視界に入る。

そこには避難し遅れた生徒が居ないか確認しに来た教員の姿があった。

リデイ「何考えてんだあいつ!?死ぬ気か!」

そしてリデイが叫んだことによりグシオンもその存在に気づいた。気づいてしまった。

すぐさま和真に背を向けシールドの穴に向けて体の正面を向けた。

このISには胸部に大口径の無反動砲が四門取り付けられており強奪され改造された今もこの砲は健在だった。

和真「させるかアアアア!!!」

すぐさま和真のジュエスタはスラストアーを吹かしてはグシオンと穴の間に割って入る。次の瞬間グシオンの胸部が火を吹き砲撃が和真を襲う。

一瞬にして辺りは爆煙に包まれる。その煙が晴れると装甲のあちこちがひび割れ、

ショートし軽くスパークが走っている。酷いところは装甲が剥がれ落ちて肌が剥き出しになり少くない出血が見て取れる。頭部装甲も半分ほど吹き飛び見えている顔は赤く染まっていた。

しかし和真はビームサーベルを抜くとスラストを吹かしてグシオンの胸部に向けて突撃、サーベルはグシオンのボディを貫通。そのまま壁へと叩きつける。

そこで力尽きたのか和真は膝から崩れ落ち、同時にグシオンも和真に覆い被さるよう倒れる。

3人「ニカズ（大将）!!!」

すぐさまデュオ達がグシオンの残骸を退けて救出。駆けつけた教員により搬送され学園内の施設で緊急手術となったのは言うまでもないだろう。

大まかな結果だけ言うと頭部に軽い裂傷（5針）、ヒビを含めて肋骨6本骨折。右足大腿骨剥離骨折。その他大小合わせれば25の切創（うち6箇所は10針以上縫合）こんな大怪我にも関わらず奇跡的に内臓にはほぼダメージがなかったのは不幸中の幸いだろう。

それから意識が戻ったのは翌日の夕方だった。

目を覚ますと鼻腔いっぱい広がる消毒液等の独特の匂いに真っ白な天井。

ここが病院かそれに準ずるものであることは寝起きの頭でも簡単に想像できた。

?? 「気がついたか？」

ベッドの脇から声を掛けられそちらに目を向けると箒が座っていた。

和真「箒……、見舞いに来てくれたのか。」

箒「ああ。今日は剣道部の方もオフだったからな。体の具合はどうだ？」

和真「ああ、固定されているところ以外は特に問題ない。あれを食らってこの程度で済んでる所を見るとISの絶対防御が無けりや死んでるなこれ。」

箒「ならよかった。ほんとに心配したんだからな。とりあえず先生に知らせてくる。」  
そう言つて箒は保健室を出ていく。

それと入れ違いにデュオ達3人が入ってくる。

デュオ「おつ、起きてんじゃん。体の方はどうよ？」

和真「固められてるところ以外は特に問題ない。で、マンロデイにはやつぱりあれはあつたのか？」

リデイ「ご親切にいつも通りの場所にあつたぜ。今回は俺らと同年代くらいだったぞ。」

ジン「話だけ聞いてて今回初めて見たが胸糞悪いことこの上ないなありや。」

和真「わかつてると思うがこの事は他言無用だぞ。余計な混乱を招きかねん。」

そんな会話をしている一方、IS学園地下の極秘施設では回収したマンロデイ及びグ

シオンの解析が行われており今まさに装甲内部から15〜18歳と推定される脳髓が発見される。

千冬「これは……………」

摩耶「少し気分が……………」

教員「積まれていたISコアについてなんです。精巧に作られた模造品でした。簡易的な検査なら難なくパス出来るほどの精度です。」

千冬「一体どこの組織だ……………。仮にこの様な物が出来上がっていたなら大々的に発表されていても可笑しくはない。」

その後も解析は続くが脳髓とISコア以外には特にこれといった進展も無く今回の事件については箝口令が敷かれることとなる。

そしてこの事件を皮切りに和真達、ひいてはIS学園に度重なる事件が舞い込んでくるのはまた少し先のお話。